

# 平成26年中の人口の動き

## 概要

平成26年中の神戸市の人口増減数は3,005人減（自然増減数2,863人減，社会増減数142人減）であり，平成27年1月1日現在の推計人口は1,537,237人となった。

神戸市の人口は3年連続で減少した。自然増減数は8年連続でマイナスとなり，減少幅も拡大した。社会増減数はマイナスに転じた。

区別にみると，東灘区，灘区，中央区の人口が増加した。兵庫区，北区，長田区，須磨区，垂水区，西区は人口減少が続いている。

自然増となったのは，東灘区のみであり，西区は震災以降初めて自然減となった。

ここで述べる人口の動きは，住民基本台帳法の規定に基づく出生・死亡・転入・転出の届出を集計したものである。（平成24年7月8日までは外国人登録法の規定に基づく届出を含む。）

「自然動態」とは，一定期間における出生・死亡に伴う人口の動きであり，「社会動態」とは，転入・転出に伴う人口の動きである。これらの自然動態と社会動態を合わせた人口の動きを「人口動態」という。

自然増減数＝出生数－死亡数　社会増減数＝転入数－転出数　人口増減数＝自然増減数＋社会増減数

## I 人口動態

### 1 概況

神戸市の平成26年の人口増減数は3,005人の減少となった。人口増減数は平成10年以降年々拡大し，平成13年には9,562人増と震災前平均（平成2年～6年の年平均，10,446人増）並みの増加を示した。しかし，その後平成14年からは概ね縮小傾向にあり，平成24年に減少に転じて以降3年連続の減少となった。

人口増減数を自然増減数と社会増減数に分けると，自然増減数は2,863人のマイナスとなった。19年以降，8年連続でマイナスになり，減少幅も拡大している。また，社会増減数は142人のマイナスとなった。社会増減数は平成24年7月に外国人住民の登録制度が変わったこともあり，平成24年はマイナスになったが，平成25年はプラスに転じていた。

人口増減数と人口の推移を長期的にみると，戦争の影響から昭和20年に38万人まで落ち込んでいた本市の人口は，終戦後の大幅な社会増加に支えられて急速に増加し，昭和31年には100万人を突破して，戦前の水準を回復した。

昭和30年代に入ると増加の速度は落ち着きを見せ始めるが，それでも昭和40年代にかけて，毎年1万～3万人の人口増加があり，この時期は概ね5年で10万人増加するペースであった。昭和50年代の前半は人口の伸び悩みが見られたが，後半には再び増加基調となり，平成6年まで年1万人程度の増加が続いた。そして，昭和59年に140万人，平成4年には150万人に達し，平成7年の震災直前は152万人を超えた。

平成7年の阪神・淡路大震災は，神戸市に戦後初めての人口減をもたらし，一時142万人まで減少した。しかし，復興の進展に伴い人口増加が見られ，平成13年には再び150万人を超えた。平成16年11月には152万977人となり，震災直前人口である152万365人を初めて超えた。以降も縮小傾向ながら人口の増加を続けていたが，平成24年に減少に転じ，平成26年は3年連続の人口減少となった。

平成27年1月1日現在で153万7,237人となっている。

図1 人口増減数の推移

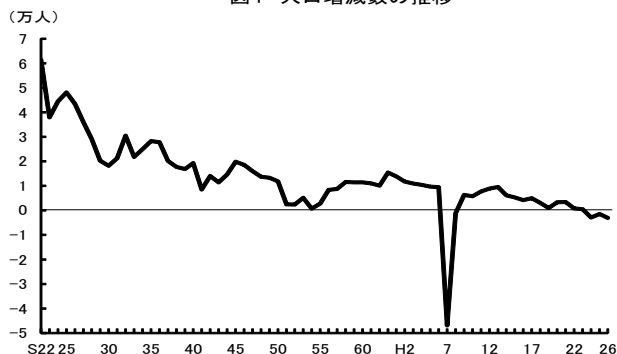


図2 人口の推移(各年10月1日現在)

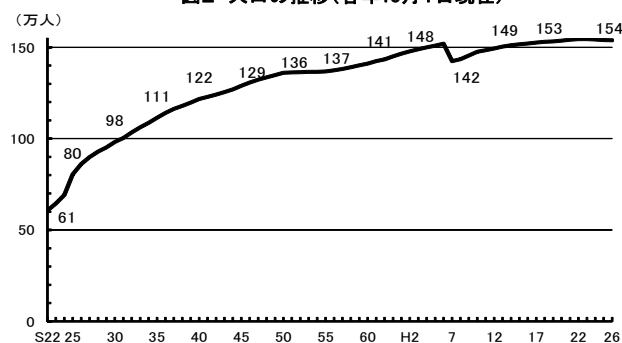


表1 人口の動きの推移

年次	全市	東灘区	灘区	中央区	兵庫区	北区	長田区	須磨区	須磨区		垂水区	西区
									本区	北須磨		
<b>人口動態（人口増減数）</b>												
震災前平均	10,446	692	△ 1,246	△ 1,283	△ 1,411	4,447	△ 1,752	99	△ 720	819	664	10,235
平成7年	△ 46,841	△ 17,330	△ 12,078	△ 6,029	△ 9,121	7,174	△ 14,361	△ 6,730	△ 7,181	451	135	11,499
8年	△ 1,115	521	△ 732	△ 1,781	△ 1,337	2,539	△ 4,052	△ 1,890	△ 975	△ 915	△ 2,594	8,211
9年	6,357	5,826	1,819	△ 304	△ 275	377	△ 2,884	△ 1,641	△ 251	△ 1,390	△ 3,477	6,916
10年	5,756	4,076	2,731	826	△ 305	23	△ 2,395	△ 1,352	△ 682	△ 670	△ 1,371	3,523
11年	7,751	2,990	1,576	1,989	241	△ 96	△ 677	△ 1,610	222	△ 1,832	154	3,184
12年	8,921	4,780	2,417	1,590	861	△ 678	△ 480	△ 1,030	47	△ 1,077	△ 1,590	3,051
13年	9,562	4,638	1,987	1,743	413	△ 240	△ 217	△ 54	849	△ 903	△ 581	1,873
14年	6,179	2,263	1,551	1,658	116	11	△ 97	△ 654	304	△ 958	△ 449	1,780
15年	5,327	2,147	1,067	1,917	222	434	△ 561	△ 901	41	△ 942	△ 175	1,177
16年	4,228	2,737	1,125	1,239	△ 525	435	△ 460	△ 872	△ 88	△ 784	△ 1,369	1,918
17年	4,945	1,982	575	2,615	△ 281	671	△ 280	△ 741	△ 53	△ 688	△ 1,142	1,546
18年	3,075	1,114	635	1,840	227	138	△ 486	△ 1,561	△ 530	△ 1,031	△ 1,142	2,310
19年	980	△ 204	555	663	△ 44	137	△ 558	△ 1,037	△ 206	△ 831	△ 638	2,106
20年	3,310	1,279	608	1,519	866	△ 170	△ 594	△ 329	707	△ 1,036	△ 436	567
21年	3,436	532	1,171	1,423	369	380	△ 714	△ 66	705	△ 771	162	179
22年	842	603	687	937	△ 515	231	△ 317	△ 1,124	40	△ 1,164	263	77
23年	501	839	704	1,167	△ 491	△ 452	△ 595	△ 743	236	△ 979	△ 114	186
24年	△ 2,846	760	325	672	△ 873	△ 882	△ 1,423	△ 1,532	△ 305	△ 1,227	40	67
25年	△ 1,507	986	451	1,204	△ 216	△ 1,478	△ 633	△ 545	81	△ 626	△ 323	△ 953
<b>26年</b>	<b>△ 3,005</b>	<b>392</b>	<b>931</b>	<b>811</b>	<b>△ 242</b>	<b>△ 1,832</b>	<b>△ 506</b>	<b>△ 412</b>	<b>261</b>	<b>△ 673</b>	<b>△ 642</b>	<b>△ 1,505</b>
<b>自然動態（自然増減数）</b>												
震災前平均	3,372	705	△ 71	△ 93	△ 474	719	△ 393	611	△ 61	672	1,368	999
平成7年	△ 2,488	△ 972	△ 1,087	△ 534	△ 1,058	619	△ 1,335	△ 8	△ 546	538	960	927
8年	2,692	452	14	△ 260	△ 472	736	△ 271	420	△ 58	478	953	1,120
9年	2,500	458	△ 25	△ 231	△ 307	656	△ 310	327	△ 42	369	857	1,075
10年	2,277	748	37	△ 321	△ 312	516	△ 274	277	△ 37	314	696	910
11年	1,991	771	56	△ 312	△ 372	405	△ 225	266	29	237	495	907
12年	2,314	836	141	△ 156	△ 355	418	△ 237	148	△ 52	200	626	893
13年	1,814	823	139	△ 281	△ 208	195	△ 294	270	55	215	348	822
14年	1,859	1,005	125	△ 215	△ 277	148	△ 279	141	11	130	382	829
15年	1,272	824	34	△ 203	△ 314	203	△ 480	132	△ 1	133	364	712
16年	1,099	726	163	△ 118	△ 350	199	△ 459	△ 8	△ 77	69	292	654
17年	△ 5	648	40	△ 183	△ 455	—	△ 485	△ 101	△ 55	△ 46	△ 52	583
18年	236	655	46	△ 179	△ 344	△ 15	△ 450	△ 163	△ 143	△ 20	96	590
19年	△ 181	564	△ 28	△ 218	△ 426	74	△ 546	△ 104	△ 86	△ 18	△ 88	591
20年	△ 513	437	34	△ 161	△ 512	△ 29	△ 600	△ 198	△ 144	△ 54	△ 48	564
21年	△ 508	493	△ 15	△ 221	△ 439	△ 2	△ 610	△ 149	△ 93	△ 56	△ 34	469
22年	△ 1,479	407	38	△ 215	△ 591	△ 120	△ 604	△ 349	△ 137	△ 212	△ 311	266
23年	△ 1,642	267	△ 1	△ 128	△ 545	△ 197	△ 697	△ 312	△ 128	△ 184	△ 259	230
24年	△ 2,473	281	△ 114	△ 201	△ 615	△ 384	△ 839	△ 475	△ 225	△ 250	△ 345	219
25年	△ 2,586	360	△ 32	△ 159	△ 695	△ 462	△ 771	△ 416	△ 137	△ 279	△ 472	61
<b>26年</b>	<b>△ 2,863</b>	<b>113</b>	<b>△ 164</b>	<b>△ 149</b>	<b>△ 559</b>	<b>△ 521</b>	<b>△ 821</b>	<b>△ 391</b>	<b>△ 109</b>	<b>△ 282</b>	<b>△ 352</b>	<b>△ 19</b>
<b>社会動態（社会増減数）</b>												
震災前平均	7,074	△ 13	△ 1,176	△ 1,190	△ 937	3,728	△ 1,359	△ 512	△ 659	147	△ 704	9,236
平成7年	△ 44,353	△ 16,358	△ 10,991	△ 5,495	△ 8,063	6,555	△ 13,026	△ 6,722	△ 6,635	△ 87	△ 825	10,572
8年	△ 3,807	69	△ 746	△ 1,521	△ 865	1,803	△ 3,781	△ 2,310	△ 917	△ 1,393	△ 3,547	7,091
9年	3,857	5,368	1,844	△ 73	32	△ 279	△ 2,574	△ 1,968	△ 209	△ 1,759	△ 4,334	5,841
10年	3,479	3,328	2,694	1,147	7	△ 493	△ 2,121	△ 1,629	△ 645	△ 984	△ 2,067	2,613
11年	5,760	2,219	1,520	2,301	613	△ 501	△ 452	△ 1,876	193	△ 2,069	△ 341	2,277
12年	6,607	3,944	2,276	1,746	1,216	△ 1,096	△ 243	△ 1,178	99	△ 1,277	△ 2,216	2,158
13年	7,748	3,815	1,848	2,024	621	△ 435	77	△ 324	794	△ 1,118	△ 929	1,051
14年	4,320	1,258	1,426	1,873	393	△ 137	182	△ 795	293	△ 1,088	△ 831	951
15年	4,055	1,323	1,033	2,120	536	231	△ 81	△ 1,033	42	△ 1,075	△ 539	465
16年	3,129	2,011	962	1,357	△ 175	236	△ 1	△ 864	△ 11	△ 853	△ 1,661	1,264
17年	4,950	1,334	535	2,798	174	671	205	△ 640	2	△ 642	△ 1,090	963
18年	2,839	459	589	2,019	571	153	△ 36	△ 1,398	△ 387	△ 1,011	△ 1,238	1,720
19年	1,161	△ 768	583	881	382	63	△ 12	△ 933	△ 120	△ 813	△ 550	1,515
20年	3,823	842	574	1,680	1,378	△ 141	6	△ 131	851	△ 982	△ 388	3
21年	3,944	39	1,186	1,644	808	382	△ 104	83	798	△ 715	196	△ 290
22年	2,321	196	649	1,152	76	351	287	△ 775	177	△ 952	574	△ 189
23年	2,143	572	705	1,295	54	△ 255	102	△ 431	364	△ 795	145	△ 44
24年	△ 373	479	439	873	△ 258	△ 498	△ 584	△ 1,057	△ 80	△ 977	385	△ 152
25年	1,079	626	483	1,363	479	△ 1,016	138	△ 129	218	△ 347	149	△ 1,014
<b>26年</b>	<b>△ 142</b>	<b>279</b>	<b>1,095</b>	<b>960</b>	<b>317</b>	<b>△ 1,311</b>	<b>315</b>	<b>△ 21</b>	<b>370</b>	<b>△ 391</b>	<b>△ 290</b>	<b>△ 1,486</b>

注) 「震災前平均」は、平成2年～6年の年平均である。

社会増減数については、須磨区の本区と北須磨との間の移動数を含む数値により算出している。

## 2 区別の状況

平成26年中の区別の人口の動きは、概ね前年までの傾向に沿っている。

東灘区は平成19年に人口が減少したが、その後7年連続で増加している。また、灘区は18年、中央区は17年連続で人口が増加している。東灘区では自然増減数、社会増減数ともにプラスが続いている。灘区、中央区では自然増減数はマイナスとなったが、社会増減数のプラスがそれを上回り、人口は増加している。

兵庫区、長田区では社会増減数はプラスであるが、自然増減数がそれを上回るマイナスとなっているため、人口減少が続いている。

北区、須磨区、垂水区、西区は自然増減数及び社会増減数ともにマイナスとなっている。

北区は平成23年に社会増減数がマイナスに転じて以降、人口減少幅が拡大し続けている。

須磨区のうち本区の人口は、2年連続でプラスである。北須磨は平成8年以降人口減少が続いており、須磨区全体では人口減少となっている。

西区は震災以降プラスであった自然増減数が初めてマイナスとなり、社会増減数の減少幅も拡大している。

図3-1 人口増減数の推移(東灘区, 灘区, 中央区)

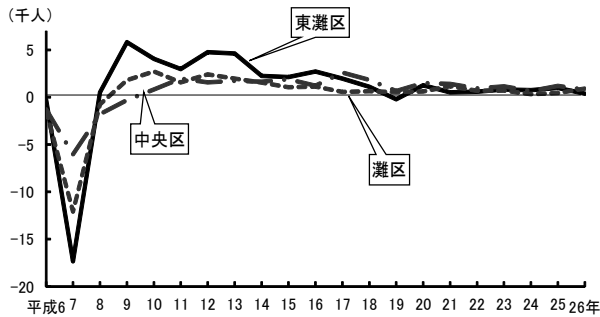


図4-1 人口数の推移(東灘区, 灘区, 中央区)

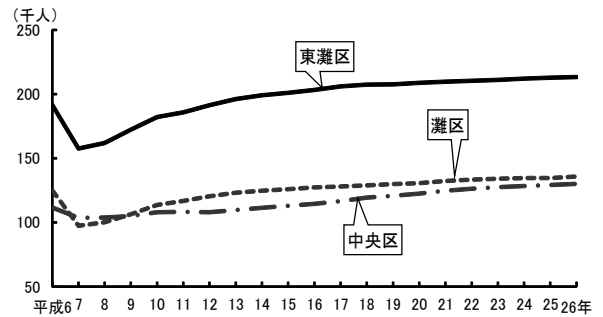


図3-2 人口増減数の推移(兵庫区, 長田区, 須磨区)

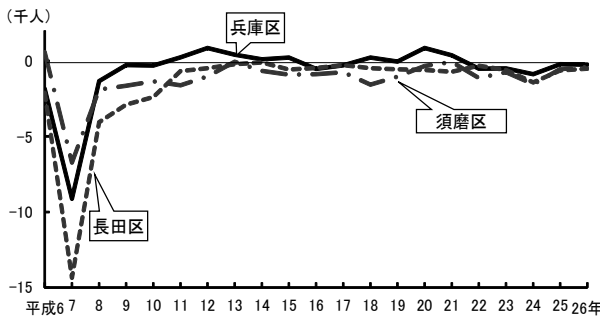


図4-2 人口数の推移(兵庫区, 長田区, 須磨区)

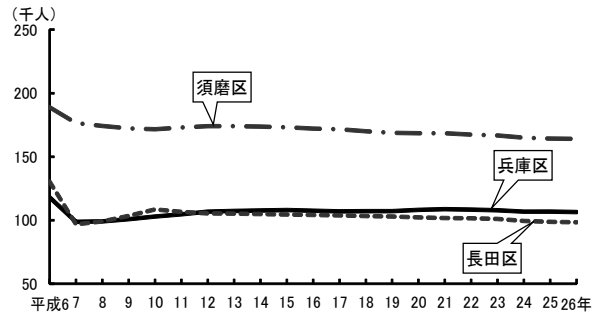


図3-3 人口増減数の推移(北区, 垂水区, 西区)

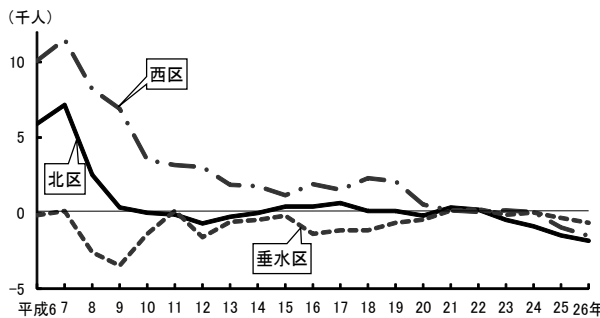
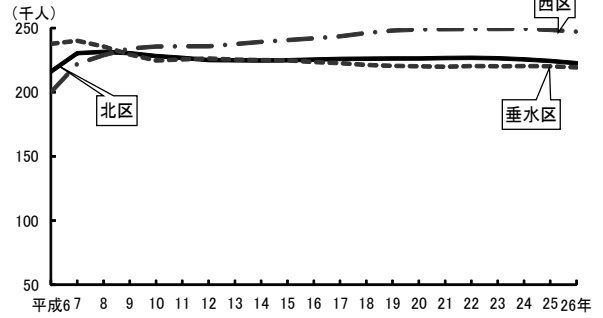


図4-3 人口数の推移(北区, 垂水区, 西区)



(参考) 表2 平成26年月別人口の動き

年次	全市	東灘区	灘区	中央区	兵庫区	北区	長田区	須磨区	須磨区		垂水区	西区
									本区	北須磨		
<b>人口増減数</b>												
平成26年1月中	△ 696	△ 165	62	△ 20	△ 81	△ 147	△ 136	△ 79	16	△ 95	△ 97	△ 33
2月中	△ 945	△ 34	13	△ 163	△ 110	△ 102	△ 58	△ 159	△ 61	△ 98	△ 113	△ 219
3月中	△ 2,398	△ 555	△ 122	△ 49	14	△ 522	△ 145	5	52	△ 47	△ 392	△ 632
4月中	2,464	672	274	666	225	△ 21	102	183	211	△ 28	152	211
5月中	△ 213	93	32	△ 20	△ 14	△ 98	10	2	9	△ 7	△ 48	△ 170
6月中	△ 173	13	65	175	△ 24	△ 164	△ 60	△ 40	—	△ 40	△ 45	△ 93
7月中	△ 14	283	△ 52	17	97	△ 131	△ 17	△ 25	20	△ 45	△ 22	△ 164
8月中	△ 177	97	197	28	△ 129	△ 129	△ 52	△ 94	△ 53	△ 41	△ 37	△ 58
9月中	△ 226	△ 205	404	23	△ 89	△ 130	△ 27	8	63	△ 55	△ 90	△ 120
10月中	466	222	72	228	36	△ 113	△ 44	34	95	△ 61	9	22
11月中	△ 444	20	△ 10	41	△ 93	△ 145	16	△ 126	△ 58	△ 68	△ 57	△ 90
12月中	△ 649	△ 49	△ 4	△ 115	△ 74	△ 130	△ 95	△ 121	△ 33	△ 88	98	△ 159
年合計	<b>△ 3,005</b>	<b>392</b>	<b>931</b>	<b>811</b>	<b>△ 242</b>	<b>△ 1,832</b>	<b>△ 506</b>	<b>△ 412</b>	<b>261</b>	<b>△ 673</b>	<b>△ 642</b>	<b>△ 1,505</b>
<b>自然増減数</b>												
平成26年1月中	△ 482	△ 16	△ 38	△ 46	△ 50	△ 70	△ 95	△ 86	△ 36	△ 50	△ 79	△ 2
2月中	△ 431	△ 32	△ 37	△ 24	△ 67	△ 70	△ 86	△ 40	△ 16	△ 24	△ 44	△ 31
3月中	△ 392	△ 10	△ 20	△ 29	△ 53	△ 64	△ 73	△ 63	△ 25	△ 38	△ 48	△ 32
4月中	△ 357	△ 3	△ 31	△ 23	△ 54	△ 33	△ 84	△ 57	△ 10	△ 47	△ 62	△ 10
5月中	△ 247	6	△ 10	△ 12	△ 65	△ 16	△ 70	△ 51	△ 35	△ 16	△ 31	2
6月中	△ 119	43	4	15	△ 43	△ 46	△ 54	△ 12	△ 7	△ 5	△ 32	6
7月中	△ 39	38	△ 9	19	△ 12	△ 22	△ 61	4	△ 2	6	5	△ 1
8月中	△ 46	10	8	△ 2	△ 38	△ 19	△ 43	△ 14	△ 6	△ 8	9	43
9月中	△ 150	31	6	△ 7	△ 36	△ 48	△ 59	△ 19	1	△ 20	△ 14	△ 4
10月中	△ 8	37	7	△ 6	△ 35	△ 16	△ 61	4	23	△ 19	12	50
11月中	△ 267	11	△ 34	△ 12	△ 48	△ 70	△ 55	1	15	△ 14	△ 44	△ 16
12月中	△ 325	△ 2	△ 10	△ 22	△ 58	△ 47	△ 80	△ 58	△ 11	△ 47	△ 24	△ 24
年合計	<b>△ 2,863</b>	<b>113</b>	<b>△ 164</b>	<b>△ 149</b>	<b>△ 559</b>	<b>△ 521</b>	<b>△ 821</b>	<b>△ 391</b>	<b>△ 109</b>	<b>△ 282</b>	<b>△ 352</b>	<b>△ 19</b>
<b>社会増減数</b>												
平成26年1月中	△ 214	△ 149	100	26	△ 31	△ 77	△ 41	7	52	△ 45	△ 18	△ 31
2月中	△ 514	△ 2	50	△ 139	△ 43	△ 32	28	△ 119	△ 45	△ 74	△ 69	△ 188
3月中	△ 2,006	△ 545	△ 102	△ 20	67	△ 458	△ 72	68	77	△ 9	△ 344	△ 600
4月中	2,821	675	305	689	279	12	186	240	221	19	214	221
5月中	34	87	42	△ 8	51	△ 82	80	53	44	9	△ 17	△ 172
6月中	△ 54	△ 30	61	160	19	△ 118	△ 6	△ 28	7	△ 35	△ 13	△ 99
7月中	25	245	△ 43	△ 2	109	△ 109	44	△ 29	22	△ 51	△ 27	△ 163
8月中	△ 131	87	189	30	△ 91	△ 110	△ 9	△ 80	△ 47	△ 33	△ 46	△ 101
9月中	△ 76	△ 236	398	30	△ 53	△ 82	32	27	62	△ 35	△ 76	△ 116
10月中	474	185	65	234	71	△ 97	17	30	72	△ 42	△ 3	△ 28
11月中	△ 177	9	24	53	△ 45	△ 75	71	△ 127	△ 73	△ 54	△ 13	△ 74
12月中	△ 324	△ 47	6	△ 93	△ 16	△ 83	△ 15	△ 63	△ 22	△ 41	122	△ 135
年合計	<b>△ 142</b>	<b>279</b>	<b>1,095</b>	<b>960</b>	<b>317</b>	<b>△ 1,311</b>	<b>315</b>	<b>△ 21</b>	<b>370</b>	<b>△ 391</b>	<b>△ 290</b>	<b>△ 1,486</b>

注) 社会増加数については、須磨区の須磨本区と北須磨との間の移動数を含む数値により算出している。

(参考) 表3 震災からの人口の状況

	H7. 1. 1	H7. 10. 1	H12. 10. 1	H17. 10. 1	H22. 10. 1	H27. 1. 1	震災直前 (a) との比較	
	震災直前推計	7年国勢調査	12年国勢調査	17年国勢調査	22年国勢調査	推計人口	増減 (f - a)	比率 (f/a)
	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)		
<b>全 市</b>	<b>1, 520, 365</b>	<b>1, 423, 792</b>	<b>1, 493, 398</b>	<b>1, 525, 393</b>	<b>1, 544, 200</b>	<b>1, 537, 237</b>	<b>16, 872</b>	<b>101. 1%</b>
東 灘 区	191, 716	157, 599	191, 309	206, 037	210, 408	213, 551	21, 835	111. 4%
灘 区	124, 538	97, 473	120, 518	128, 050	133, 451	135, 946	11, 408	109. 2%
中 央 区	111, 195	103, 711	107, 982	116, 591	126, 393	130, 341	19, 146	117. 2%
兵 庫 区	117, 558	98, 856	106, 897	106, 985	108, 304	106, 322	△ 11, 236	90. 4%
北 区	217, 166	230, 473	225, 184	225, 945	226, 836	222, 307	5, 141	102. 4%
長 田 区	129, 978	96, 807	105, 464	103, 791	101, 624	98, 268	△ 31, 710	75. 6%
須 磨 区	188, 949	176, 507	174, 056	171, 628	167, 475	163, 976	△ 24, 973	86. 8%
本 区	78, 908	63, 255	70, 016	71, 405	72, 692	72, 933	△ 5, 975	92. 4%
北 須 磨	110, 041	113, 252	104, 040	100, 223	94, 783	91, 043	△ 18, 998	82. 7%
垂 水 区	237, 735	240, 203	226, 230	222, 729	220, 411	219, 434	△ 18, 301	92. 3%
西 区	201, 530	222, 163	235, 758	243, 637	249, 298	247, 092	45, 562	122. 6%

注) 「推計人口」とは、直近国勢調査結果を基礎に、毎月の住民基本台帳(平成24年7月8日までは住民基本台帳及び外国人登録)の届出数を加減し算出したものである。

## Ⅱ 自然動態

### 1 概況

平成26年中の自然増減数は2,863人減となり、前年に比べて減少幅は拡大した。自然増減数は、震災のあった平成7年を除き、長くプラスの状態が続いていたが、17年にマイナスに転じ、18年に再びプラスとなったものの、19年以降8年連続で減少し、減少幅も拡大している。

出生数は12,218人で、前年より219人減少した。一方、死亡数は15,081人で、前年より58人増加した。平成13年以降、死亡数は概ね増加傾向にある。

自然増減率をみると、出生率は7.94%（パーミル：人口千人に対する割合）で、前年を0.13ポイント下回った。死亡率は前年を0.05ポイント上回り9.81%となった。出生数の伸びを死亡数の伸びが上回り、自然増減率は△1.86%と、前年を0.18ポイント下回り8年連続で減少となった。

表4 自然動態及び自然動態率

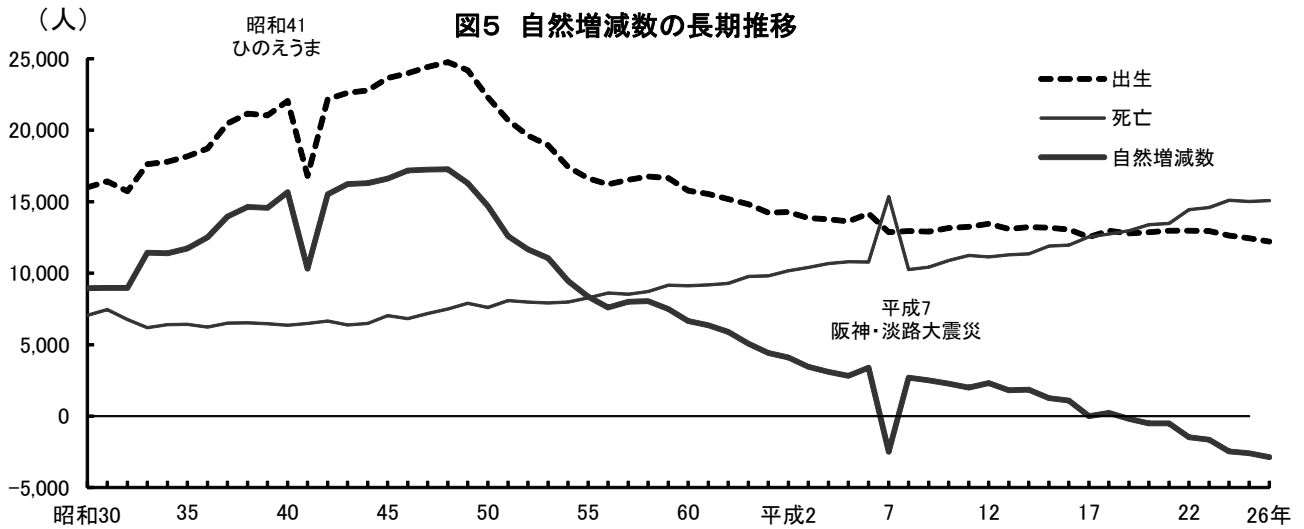
(単位：人，%)

年次・区	自然増減数	出生数	死亡数	自然増減率	出生率	死亡率	a) 人口 (10月1日現在)
震災前平均	3,372	13,943	10,571	2.25	9.30	7.05	1,498,720
平成7年	△ 2,488	12,863	15,351	△ 1.75	9.03	10.78	1,423,792
8年	2,692	12,943	10,251	1.88	9.02	7.15	1,434,572
9年	2,500	12,921	10,421	1.72	8.88	7.16	1,454,632
10年	2,277	13,164	10,887	1.54	8.92	7.38	1,475,342
11年	1,991	13,238	11,247	1.34	8.92	7.58	1,483,655
12年	2,314	13,460	11,146	1.55	9.01	7.46	1,493,398
13年	1,814	13,110	11,296	1.21	8.72	7.51	1,503,480
14年	1,859	13,219	11,360	1.23	8.75	7.52	1,510,662
15年	1,272	13,182	11,910	0.84	8.69	7.86	1,516,155
16年	1,099	13,062	11,963	0.72	8.59	7.87	1,520,267
17年	△ 5	12,540	12,545	△ 0.00	8.22	8.22	1,525,393
18年	236	12,984	12,748	0.15	8.49	8.33	1,529,817
19年	△ 181	12,792	12,973	△ 0.12	8.35	8.47	1,532,428
20年	△ 513	12,878	13,391	△ 0.33	8.38	8.72	1,536,433
21年	△ 508	12,981	13,489	△ 0.33	8.42	8.75	1,541,214
22年	△ 1,479	12,979	14,458	△ 0.96	8.40	9.36	1,544,200
23年	△ 1,642	12,954	14,596	△ 1.06	8.39	9.45	1,544,496
24年	△ 2,473	12,636	15,109	△ 1.60	8.19	9.80	1,542,128
25年	△ 2,586	12,437	15,023	△ 1.68	8.08	9.76	1,539,751
<b>平成26年</b>	<b>△ 2,863</b>	<b>12,218</b>	<b>15,081</b>	<b>△ 1.86</b>	<b>7.94</b>	<b>9.81</b>	<b>1,537,864</b>
東灘区	113	1,847	1,734	0.53	8.66	8.13	213,358
灘区	△ 164	1,098	1,262	△ 1.21	8.08	9.29	135,888
中央区	△ 149	1,133	1,282	△ 1.14	8.70	9.85	130,187
兵庫区	△ 559	844	1,403	△ 5.25	7.93	13.18	106,453
北区	△ 521	1,576	2,097	△ 2.34	7.08	9.42	222,695
長田区	△ 821	653	1,474	△ 8.34	6.64	14.98	98,391
須磨区	△ 391	1,270	1,661	△ 2.38	7.73	10.12	164,189
本区	△ 109	630	739	△ 1.49	8.64	10.13	72,929
北須磨	△ 282	640	922	△ 3.09	7.01	10.10	91,260
垂水区	△ 352	1,889	2,241	△ 1.60	8.61	10.21	219,384
西区	△ 19	1,908	1,927	△ 0.08	7.71	7.79	247,319

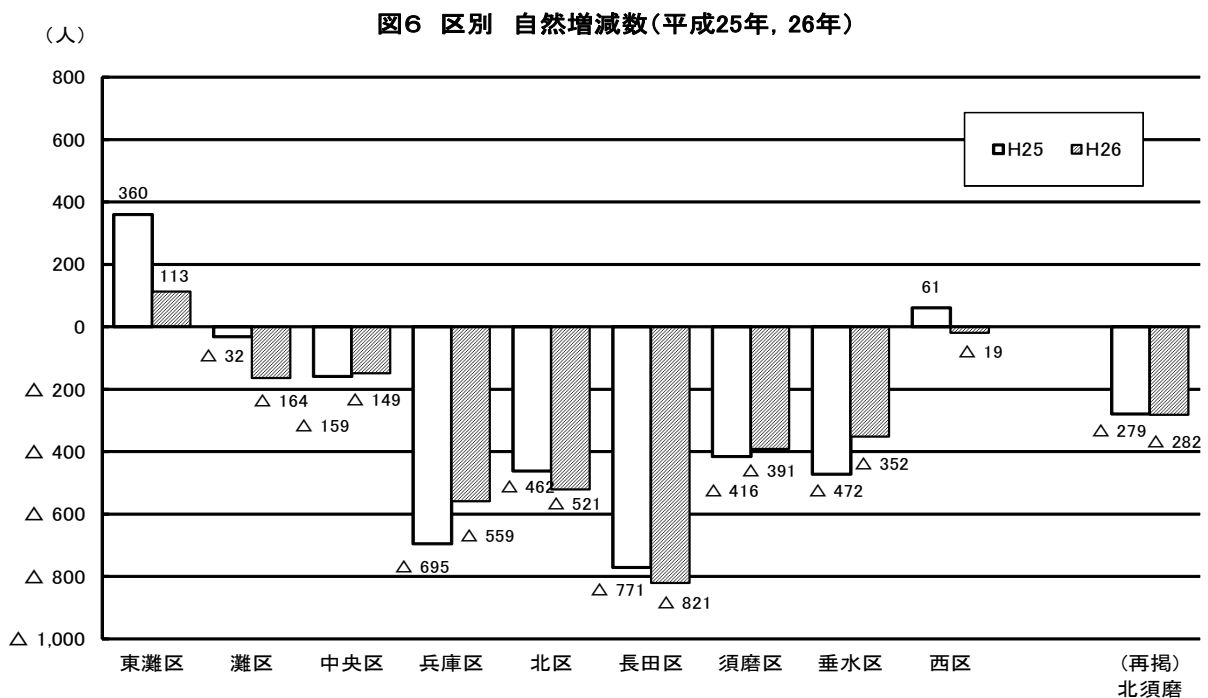
注) 自然増減率，出生率，死亡率は，各年10月1日現在の人口1,000人当たりの率である。

a) 平成7年，12年，17年，22年は国勢調査結果，10年は被災地人口実態調査結果，それ以外は推計人口である。

自然増減数の長期的な推移をみると、昭和33年以降、出生数はほぼ毎年増加し、死亡数は横ばいの状態が続いていたため、自然増減数は出生数に比例して増加した。昭和45年を過ぎると、それまで横ばいで推移していた死亡数が、徐々に増加傾向を示すようになった。また、出生数は第2次ベビーブーム期の昭和48年をピークに減少に転じ、自然増減数の減少が始まった。震災後の出生数は横ばいが続き、平成17年に12,540人まで減少したものの、その後は小幅に増減を繰り返す、平成22年以降は緩やかに減少が続いている。一方、震災後の死亡数は13年以降増加傾向にある。26年は死亡数が出生数を上回っているため、自然増減数もマイナスとなり、8年連続の減少となった。



区別にみると、自然増となったのは東灘区の113人の増加のみで、他の区では減少している。最も減少しているのは長田区の821人で、兵庫区の559人がこれに続いている。また、この2区に中央区を加えた3区は震災前から減少が続いている。灘区は164人減少し、4年連続減少となった。須磨区のうち本区は109人減、北須磨は282人減となり、須磨区全体で391人減少となった。本区は平成15年から12年連続、北須磨は17年から10年連続減少となった。須磨区全体でも11年連続で減少している。垂水区は352人の減少となり、19年以降8年連続減少となった。北区でも521人減少し、20年以降7年連続減少となった。



## 2 出生

平成26年の出生数は12,218人で、前年の12,437人に比べ219人減少した。

また、出生率は7.94%で、前年の8.08%より0.13ポイント下回った。

出生率の推移をみると、昭和30年代から40年代にかけて16%台から18%台へと上昇傾向にあった。しかし、昭和48年の第2次ベビーブーム期をピークに低下に転じ、昭和60年代には10%台まで低下した。

その後もゆるやかな低下傾向が続き、平成9年以降は8%台で推移しているが、低下傾向が続いている。平成6年の9.33%と比べると、20年間で1.39ポイント低下している。

このような出生率の低下傾向は、全国でも同様にみられるが、神戸市の出生率は、過去20年間に全国値を下回っている。

区別にみると、出生率の高い順に中央区(8.70%)、東灘区(8.66%)、垂水区(8.61%)となっている。一方、出生率が低いのは、長田区(6.64%)、北区(7.08%)、西区(7.71%)である。

区別の出生率を20年前の平成6年及び10年前の平成16年と比較すると、北区、長田区、垂水区、西区では低下を続けている。東灘区、灘区、兵庫区では、平成6年から16年にかけては上昇したが、平成16年から26年にかけては低下している。須磨区では、平成6年から16年にかけては低下したが、平成16年から26年にかけては上昇している。中央区では上昇を続けている。平成26年の出生率は、灘区、中央区、兵庫区を除く6区で平成6年を下回っている。

図7 出生率及び死亡率の推移(神戸市, 全国)

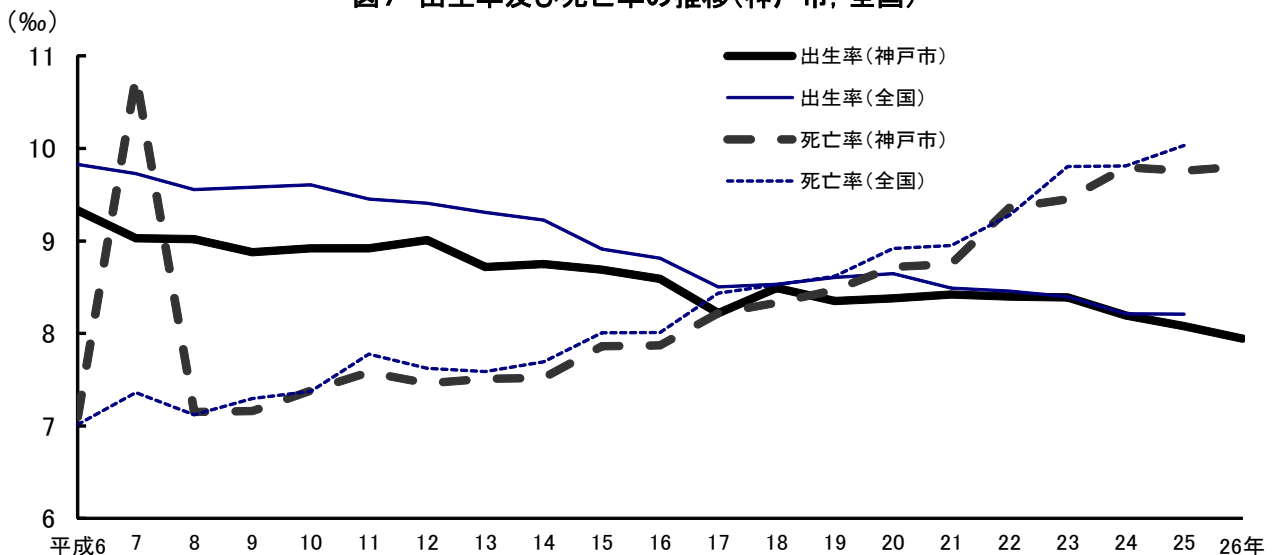


表5 出生率, 死亡率の推移(神戸市, 全国)

(単位: ‰)		平成6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
		出生率																				
神戸市		9.33	9.03	9.02	8.88	8.92	8.92	9.01	8.72	8.75	8.69	8.59	8.22	8.49	8.35	8.38	8.42	8.40	8.39	8.19	8.08	<b>7.94</b>
全国		9.83	9.73	9.55	9.58	9.60	9.45	9.41	9.31	9.23	8.91	8.81	8.50	8.53	8.60	8.65	8.49	8.46	8.40	8.21	8.21	...
		死亡率																				
神戸市		7.10	10.78	7.15	7.16	7.38	7.58	7.46	7.51	7.52	7.86	7.87	8.22	8.33	8.47	8.72	8.75	9.36	9.45	9.80	9.76	<b>9.81</b>
全国		7.02	7.36	7.12	7.30	7.37	7.78	7.62	7.59	7.69	8.01	8.01	8.44	8.53	8.62	8.92	8.95	9.28	9.80	9.81	10.03	...

資料: 総務省統計局『人口推計月報』(全国)

注) 平成18年から21年の値は、平成22年国勢調査結果(確定数)に基づき補間補正した人口により算出している。

平成26年全国数値は未定。

### 3 死亡

平成26年の死亡数は15,081人で、前年の15,023人と比べ58人増加した。

また、死亡率は9.81%で、前年の9.76%より0.05ポイント上昇した。

死亡率の推移をみると、昭和30年代以降おおむね5%台で横ばいに推移していたが、昭和55年に6%台、平成4年には7%台、17年からは8%台と上昇傾向が続いており、22年からは9%台となった。この20年間では、平成6年の7.10%から2.71ポイント上昇している。

死亡率の上昇傾向は、全国でも同様である。なお、昭和56年以降全国値をほぼ上回っていた神戸市の死亡率は、平成11年以降全国値を下回る傾向が続いている。

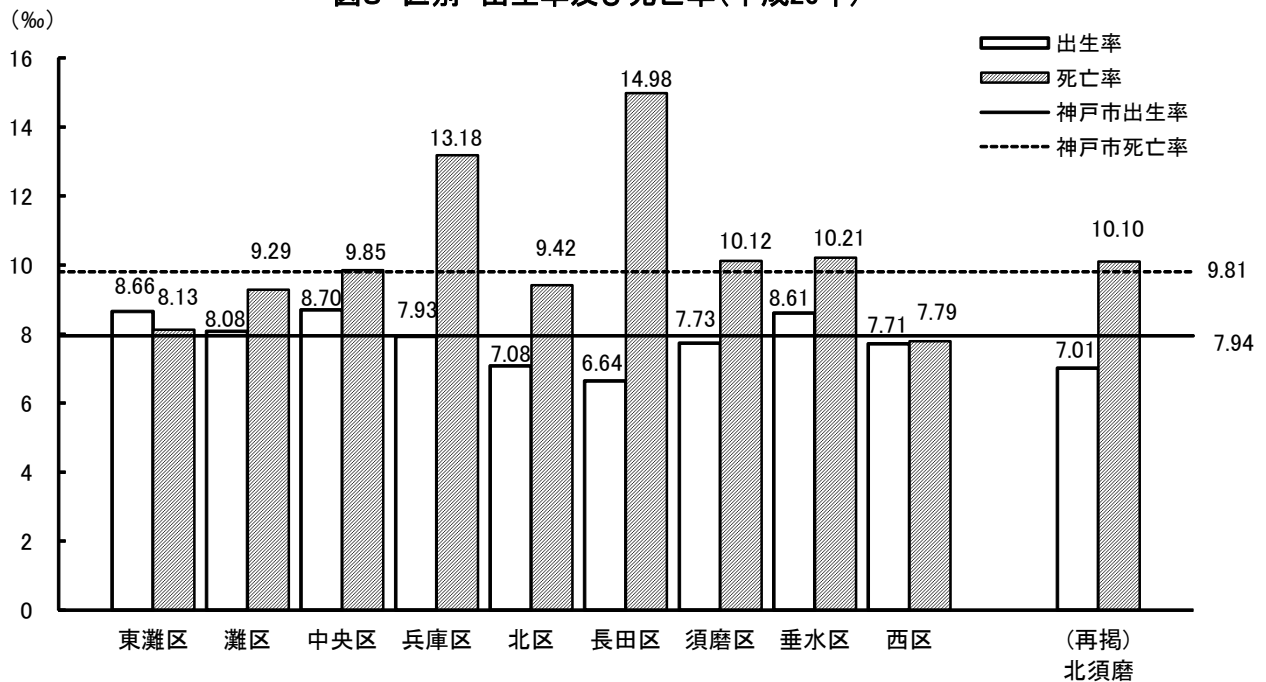
区別にみると、死亡率の高い順に長田区(14.98%)、兵庫区(13.18%)、垂水区(10.21%)となっている。一方、死亡率が低いのは、西区(7.79%)、東灘区(8.13%)である。東灘区を除いた8区では死亡率が出生率を上回っている。

区別の死亡率を20年前の平成6年及び10年前の16年と比較すると、北区、長田区、須磨区、垂水区、西区では6年から上昇を続けている。東灘区、灘区、中央区、兵庫区では6年から16年にかけて低下し、16年から26年にかけては上昇している。26年の死亡率は、全区で6年の率を上回っている。

表6 区別 出生率と死亡率の推移

(単位：‰)											
年次	東灘区	灘区	中央区	兵庫区	北区	長田区	須磨区	本区	北須磨	垂水区	西区
出生率											
平成6年	9.55	7.77	8.23	6.90	9.34	7.66	9.53	8.53	10.24	11.53	10.39
16年	9.86	9.47	8.34	7.94	7.99	7.26	7.69	8.40	7.19	9.25	8.65
26年	8.66	8.08	8.70	7.93	7.08	6.64	7.73	8.64	7.01	8.61	7.71
死亡率											
平成6年	6.33	8.42	9.40	11.30	5.85	10.75	6.19	9.43	3.87	5.65	4.78
16年	6.29	8.18	9.37	11.20	7.11	11.67	7.74	9.47	6.50	7.95	5.95
26年	8.13	9.29	9.85	13.18	9.42	14.98	10.12	10.13	10.10	10.21	7.79

図8 区別 出生率及び死亡率(平成26年)





### Ⅲ 社会動態

#### 1 概況

平成26年中の社会増減数は142人減となった。前年と比べ1,221人減少し、マイナスに転じた。

転入数は76,918人で、そのうち市外からの転入者数は49,169人であった。一方、転出者数は77,060人で、そのうち市外への転出数は48,057人であった。

社会増減率をみると、社会増減率は△0.09%で前年の0.70%より0.79ポイント下降した。転入率は50.02%で、うち市外からは31.97%、転出率は50.11%で、うち市外へは31.25%となり、転入率は前年より0.99ポイント下降し、転出率は前年より0.20ポイント下降している。

表 7 社会動態及び社会動態率

(単位：人，%)

年次・区	社会増減数	転入		転出		社会増減率	転入率		転出率		a) 人口 (10月1日現在)
		うち市外から	うち市外へ	うち市外から	うち市外へ		うち市外から	うち市外へ			
震災前平均	7,074	103,810	64,346	96,736	57,205	4.72	69.27	42.93	64.55	38.17	1,498,720
平成7年	△44,353	111,332	53,551	155,685	97,787	△31.15	78.19	37.61	109.35	68.68	1,423,792
8年	△3,807	109,014	60,294	112,821	64,625	△2.65	75.99	42.03	78.64	45.05	1,434,572
9年	3,857	112,757	63,313	108,900	59,487	2.65	77.52	43.53	74.86	40.89	1,454,632
10年	3,479	112,261	61,527	108,782	58,059	2.36	76.09	41.70	73.73	39.35	1,475,342
11年	5,760	104,957	59,655	99,197	53,948	3.88	70.74	40.21	66.86	36.36	1,483,655
12年	6,607	100,251	60,005	93,644	53,515	4.42	67.13	40.18	62.71	35.83	1,493,398
13年	7,748	95,641	59,607	87,893	51,911	5.15	63.61	39.65	58.46	34.53	1,503,480
14年	4,320	89,755	56,238	85,435	51,939	2.86	59.41	37.23	56.55	34.38	1,510,662
15年	4,055	90,174	56,098	86,119	52,035	2.67	59.48	37.00	56.80	34.32	1,516,155
16年	3,129	86,887	54,656	83,758	51,620	2.06	57.15	35.95	55.09	33.95	1,520,267
17年	4,950	85,774	54,997	80,824	50,098	3.25	56.23	36.05	52.99	32.84	1,525,393
18年	2,839	86,088	54,009	83,249	51,268	1.86	56.27	35.30	54.42	33.51	1,529,817
19年	1,161	80,789	51,920	79,628	50,760	0.76	52.72	33.88	51.96	33.12	1,532,428
20年	3,823	82,648	53,098	78,825	49,445	2.49	53.79	34.56	51.30	32.18	1,536,433
21年	3,944	82,355	52,748	78,411	49,034	2.56	53.44	34.22	50.88	31.82	1,541,214
22年	2,321	80,214	50,535	77,893	48,104	1.50	51.95	32.73	50.44	31.15	1,544,200
23年	2,143	78,657	50,290	76,514	47,949	1.39	50.93	32.56	49.54	31.05	1,544,496
24年	△373	77,964	49,450	78,337	48,181	△0.24	50.56	32.07	50.80	31.24	1,542,128
25年	1,079	78,538	49,697	77,459	47,100	0.70	51.01	32.28	50.31	30.59	1,539,751
<b>平成26年</b>	<b>△142</b>	<b>76,918</b>	<b>49,169</b>	<b>77,060</b>	<b>48,057</b>	<b>△0.09</b>	<b>50.02</b>	<b>31.97</b>	<b>50.11</b>	<b>31.25</b>	<b>1,537,864</b>
東灘区	279	12,326	9,357	12,047	8,885	1.31	57.77	43.86	56.46	41.64	213,358
灘区	1,095	8,753	5,248	7,658	4,854	8.06	64.41	38.62	56.36	35.72	135,888
中央区	960	12,312	8,082	11,352	6,727	7.37	94.57	62.08	87.20	51.67	130,187
兵庫区	317	7,228	4,083	6,911	3,308	2.98	67.90	38.35	64.92	31.07	106,453
北区	△1,311	6,817	4,874	8,128	5,692	△5.89	30.61	21.89	36.50	25.56	222,695
長田区	315	4,997	2,139	4,682	2,146	3.20	50.79	21.74	47.59	21.81	98,391
須磨区	△21	6,954	3,651	6,975	3,680	△0.13	42.35	22.24	42.48	22.41	164,189
本区	370	3,908	1,963	3,538	1,780	5.07	53.59	26.92	48.51	24.41	72,929
北須磨	△391	3,489	1,688	3,880	1,900	△4.28	38.23	18.50	42.52	20.82	91,260
垂水区	△290	8,729	5,549	9,019	5,639	△1.32	39.79	25.29	41.11	25.70	219,384
西区	△1,486	8,802	6,186	10,288	7,126	△6.01	35.59	25.01	41.60	28.81	247,319

注) 社会増減率は各年10月1日現在の人口1,000人当たりの率である。

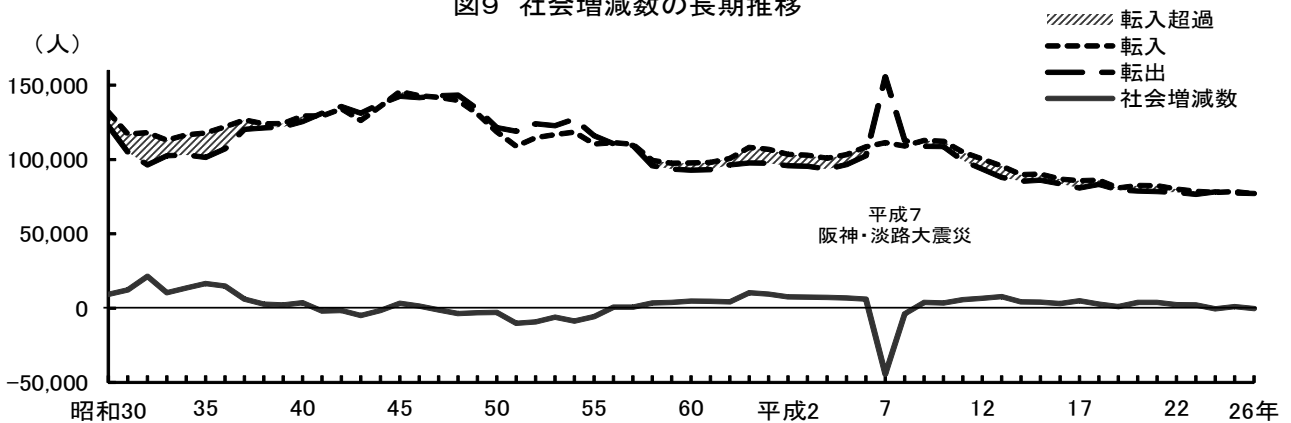
各年の転入・転出数には、同一区域内での本区、支所、出張所相互間の数値は含んでいない。ただし、須磨区のうち本区と北須磨については本区・出張所間の移動数を含む数値となっている。

転入・転出数には、市外との移動のほか、市内区間移動、その他の増減(転出取消、職権記載等、職権消除等、平成24年の法改正に伴う外国人住民の取扱変更による数値変動)を含む。

a) 平成7年、12年、17年、22年は国勢調査結果、10年は被災地人口実態調査結果、それ以外は推計人口である。

社会増減数の長期的な推移をみると、昭和30年代は社会増減数が6年連続で1万人以上の増加になるなど、大幅な転入超過で推移していた。昭和40年代に入ると、転出数の増加により社会増減数は伸び悩みの状態となり、特に昭和40年代後半から50年代前半にかけては、社会増減数がマイナスの状態が9年間続いた。その後、ニュータウン開発等により市内の住宅供給が活発になると、転出数は昭和54年を境に減少し、56年に再び転入超過となった。その後は転入数、転出数とも横ばいで推移し、年間4,000人から10,000人の転入超過が続いていたが、平成7年の震災では4万人を超える転出超過となった。9年以降は再び転入超過となり、増加幅も年々拡大し、13年には震災前平均の7,074人を超えた。しかし、14年以降は転入超過が続いていたものの増加幅は縮小傾向にあり、24年にはマイナスとなった。25年はプラスに戻ったが、26年は再びマイナスに転じた。

図9 社会増減数の長期推移



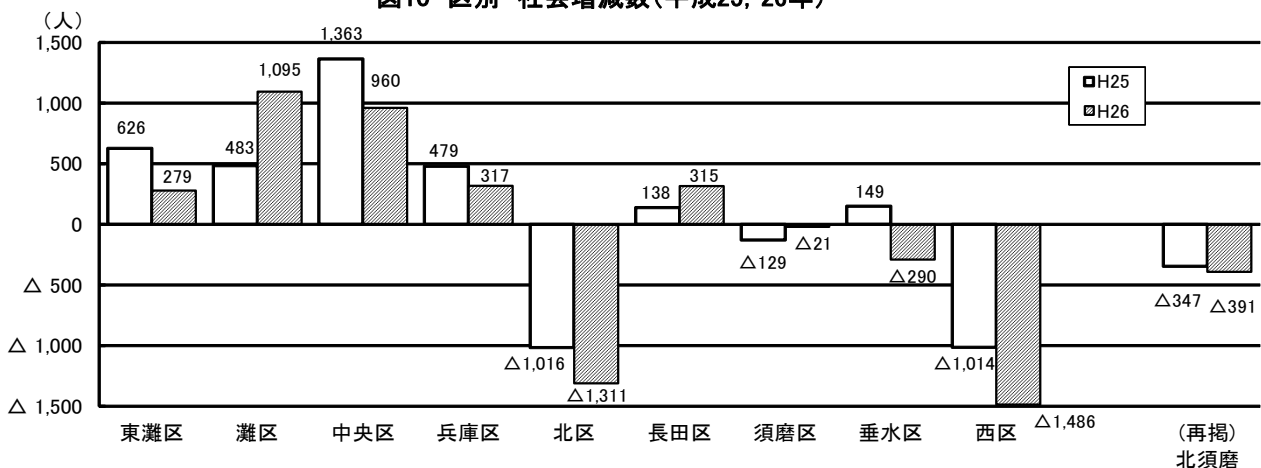
社会増減数を区別にみると、灘区の1,095人が最も多い。次いで中央区960人、兵庫区317人、長田区315人、東灘区279人と5区で増加している。

東灘区、灘区、中央区の東部3区は震災前は減少傾向にあり、震災の影響を受けさらに大きく減少したが、その後はプラスが続いた。平成19年に東灘区がマイナスに転じたものの、以降はプラスを続けている。

兵庫区は、平成24年は16年連続のマイナスとなったが、25年以降は2年連続プラスである。長田区は小幅で増減を繰り返しているが、平成26年の社会増減数はプラスで、前年より大きく増加した。

一方、北区、須磨区、垂水区、西区では社会増減数がマイナスとなった。北区では、平成26年は1,311人減となり、4年連続のマイナスとなった。須磨区のうち本区は370人増、一方北須磨は391人減で、須磨区全体では21人の減少となり、5年連続でマイナスとなった。垂水区は一貫して社会増減数のマイナスが続いていたが、平成21年以降はプラスが続いていた。平成26年は6年ぶりのマイナスとなった。西区では平成21年に初めて社会増減数がマイナスに転じて以降、マイナスが続いており、26年は1,486人減と大きく減少し、6年連続減となった。

図10 区別 社会増減数(平成25, 26年)



## 2 相手地域別の状況

阪神間6市および大阪府に対して、4年連続転出超過となっている。三木、小野、三田では24年には一旦転出超過になったものの、25年以降2年連続転入超過である。東播臨海部とその他の県下からは、転入超過が続いている。

依然東日本への転出超過が続いており、転出超過の幅は前年より拡大している。

### (1) 阪神間6市

967人の転出超過であった。前年の357人と比べ転出超過数は大幅に増加し、4年連続の転出超過となった。震災前平均（平成2年～6年の年平均）は、3,000人を越える転入超過であったが、平成14年以降転出超過の傾向にある。地域別では西宮市が513人の転出超過と最も多く、川西市のみが転入超過となっている。

区別にみると、転出超過数の最も多かったのは、西区の265人、次いで北区の154人である。前年は中央区と兵庫区が転入超過であったが、平成26年はどちらも減少に転じ、全区で転出超過となった。

※阪神間6市・・・芦屋、西宮、宝塚、尼崎、伊丹、川西の各市

### (2) 東播臨海部

113人の転入超過であった。前年の210人と比べ、転入超過数は減少した。震災前は2,000人程度の転出超過が続いていたが、平成11年以降転入超過となっている。地域別では加古川市が最も多く170人の転入超過であった。一方、明石市は2年連続転出超過となった。

区別にみると、転入超過数が最も多かったのは中央区の151人であった。一方、転出超過数が最も多かったのは西区の145人であった。

※東播臨海部・・・明石、加古川、高砂の各市と加古郡（稲美町、播磨町）

### (3) 三木・小野・三田

118人の転入超過であった。震災前は700人程度の転出超過で推移していたが、平成11年以降転入超過の傾向にある。地域別に見ると三田市からの転入超過が最も多く47人であった。

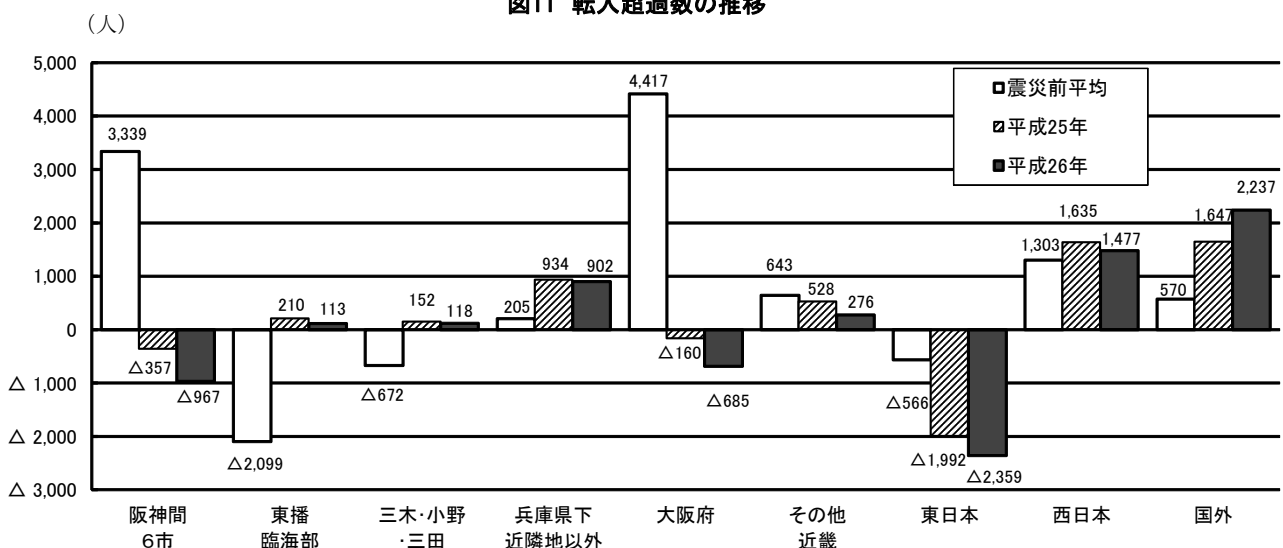
区別にみると、転入超過数が最も多かったのは須磨区の41人で、一方、転出超過数が最も多かったのは東灘区と西区の7人であった。

### (4) その他県下

902人の転入超過であった。前年の934人と比べ僅かに減少したものの、平成9年以来18年連続の転入超過となり、震災前平均約200人を大きく上回っている。

区別にみると、全区で転入超過であり、中央区の162人が最も多く、垂水区の128人が続いている。

図11 転入超過数の推移



(5) 大阪府

685人の転出超過となった。平成8年以降，転入超過傾向にあったが，23年以降4年連続しての転出超過となっている。なお，このうち大阪市に対しては735人の転出超過となっており，大阪市を除いた大阪府下では50人の転入超過となっている。

区別にみると，転出超過数が最も多かったのは西区の280人，次いで北区の213人である。一方転入超過数は東灘区の132人が最も多い。

(6) その他近畿

前年を252人下回る276人の転入超過であった。平成8年以降，19年連続転入超過となっている。

区別にみると，北区，須磨区，垂水区で転出超過に転じている。最も転入超過数が多かったのは東灘区の108人であった。

(7) 東日本

前年を367人上回る2,359人の転出超過であった。震災前は600人程度であった転出超過数は，平成10年以降概ね拡大傾向が続いている。平成23年3月に起きた東日本大震災による影響からか23年の転出超過幅は大きく縮小したが，その後は転出超過幅は拡大し，25年は東日本大震災前の水準に戻った。

区別にみると，全区で転出超過になっている。最も転出超過数が多かったのは北区の578人で，次いで西区の447人であった。

(8) 西日本

前年を158人下回る1,477人の転入超過であった。平成17年以降，震災前平均約1,300人を概ね上回っている。

区別にみると北区を除く8区で転入超過となっており，東灘区541人，中央区311人，兵庫区176人の順に多くなっている。

(9) 国外

前年を590人上回る2,237人の転入超過であった。

区別にみると，全ての区で転入超過になっており，転入数の多い順に中央区849人，兵庫区512人，灘区291人となっている。

図12 相手地域別転入超過数(平成26年)

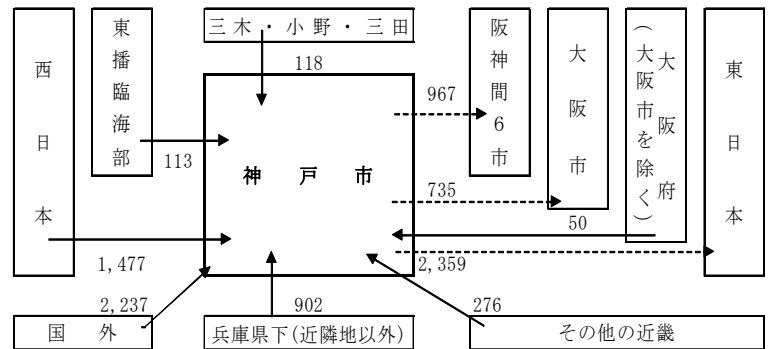


表 8 区、相手地域別転入超過数

相手地域	震災前	平成26年													
	平均	全市	全市	東灘区	灘区	中央区	兵庫区	北区	長田区	須磨区	本区	北須磨	垂水区	西区	
転入超過数	7,141	2,597	1,112	524	1,271	1,430	453	△1,288	379	△9	376	△385	△280	△1,368	
市内とのa)	32	-	-	52	877	75	△322	△470	386	20	193	△173	△190	△428	
市外との	7,140	2,597	1,112	472	394	1,355	775	△818	△7	△29	183	△212	△90	△940	
近畿	5,833	1,307	△243	292	293	359	169	△350	△184	△49	84	△133	△110	△663	
近隣地	568	5	△736	△53	45	105	62	△191	△150	△65	5	△60	△72	△417	
阪神間6市	3,339	△357	△967	△109	△30	△85	△37	△154	△109	△64	△10	△54	△114	△265	
東播磨臨海部	△2,099	210	113	63	61	151	99	△45	△51	△42	△4	△38	22	△145	
三木・小野・三田	△672	152	118	△7	14	39	-	8	10	41	9	32	20	△7	
兵庫県下(近隣地以外)	205	934	902	105	118	162	114	94	31	119	100	19	128	31	
大阪府	4,417	△160	△685	132	58	△8	△36	△213	△84	△98	△10	△88	△156	△280	
その他近畿	643	528	276	108	72	100	29	△40	19	△5	△1	△4	△10	3	
東日本	△566	△1,992	△2,359	△439	△226	△164	△82	△578	△83	△155	△47	△108	△185	△447	
西日本	1,303	1,635	1,477	541	36	311	176	△44	80	139	87	52	144	94	
国外	570	1,647	2,237	78	291	849	512	154	180	36	59	△23	61	76	

注) 「従前の住所地なし」又は「抹消」を除く。

「阪神間6市」とは，芦屋，西宮，宝塚，尼崎，伊丹，川西の各市をいう。

「東播磨臨海部」とは，明石，加古川，高砂の各市と加古郡(稲美町，播磨町)をいう。

a) 須磨区内の「本区」と「北須磨」の間の移動の数値を含む。(その他の区については，区内移動の数値は含まない。)

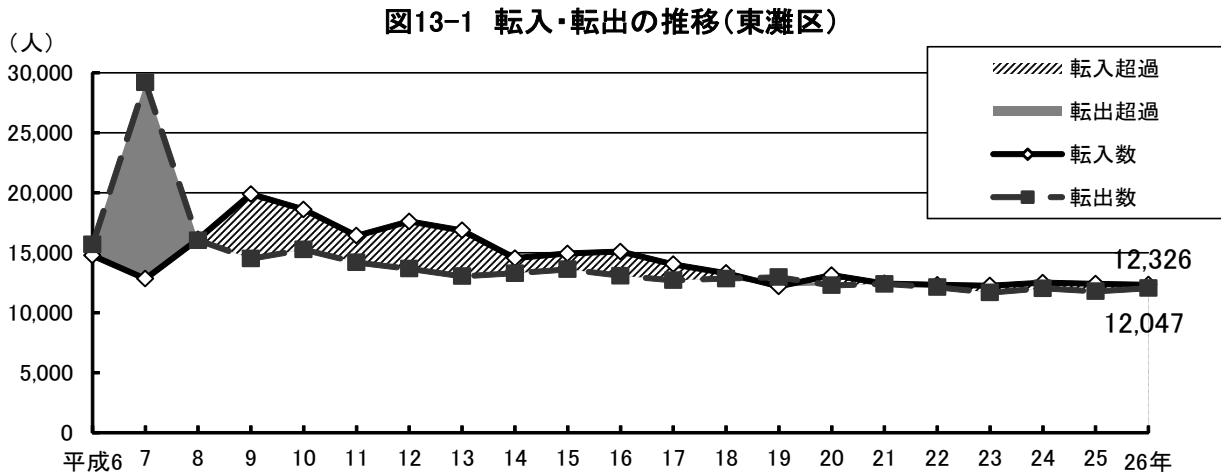
### 3 区別の状況

#### (1) 東灘区

震災前の平成4～6年には、毎年700人程度の転出超過で推移していたが、震災の被害が大きく、平成7年は16,358人と、市内で最も多い転出超過となった。しかし転出数が平成8年から13年までゆるやかに減少し、転入数は震災前平均を上回る水準で推移したことから、その後大幅な転入超過となった。

その後も転入超過が続いていたが、平成19年に震災後初めて768人の転出超過となった。

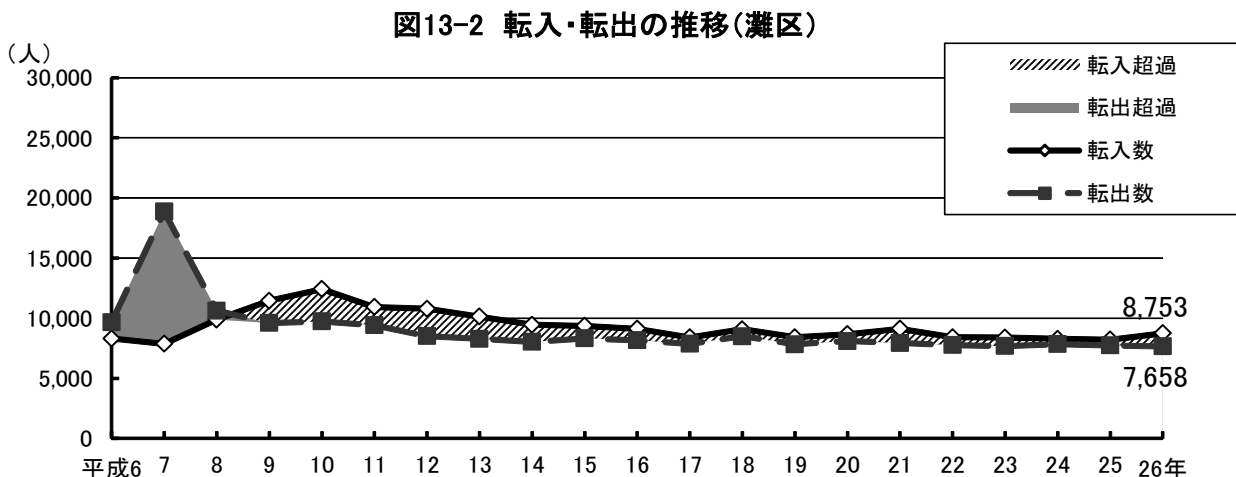
しかし、平成20年に再び転入超過となり、平成26年は7年連続の転入超過となった。転入数は12,326人、転出数は12,047人で、転入超過数は279人であった。



#### (2) 灘区

震災前は1,200人程度の転出超過で推移していたが、平成7年には10,991人の転出超過となった。その後、転出数は横ばいであったが、転入数が増えたことから、平成9年から転入超過となった。平成10年以降は、転入数、転出数ともに減少傾向にあるが、転入超過が続いている。

平成26年は転入数8,753人、転出数7,658人で、1,095人の転入超過となった。

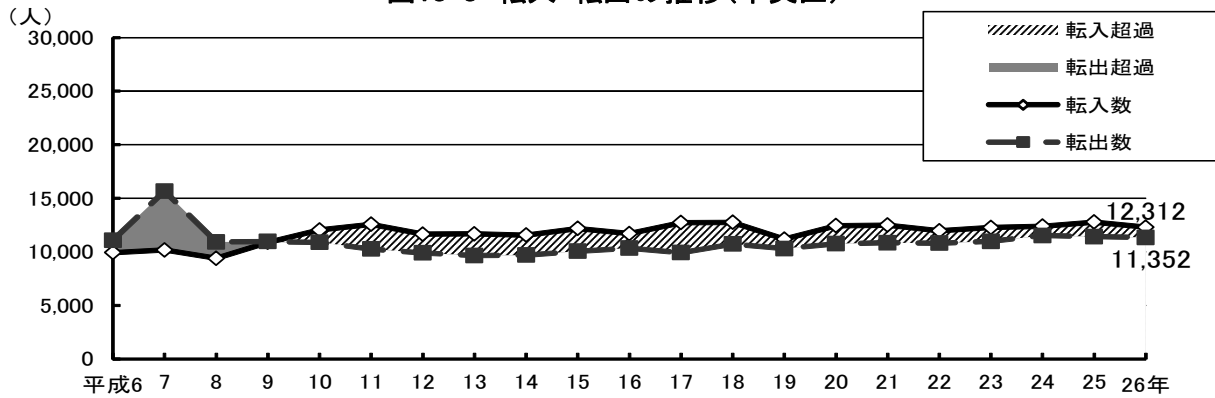


#### (3) 中央区

震災前は1,000人前後の転出超過で推移していたが、平成7年は5,495人の転出超過となった。その後、転出数は横ばいであったが、転入数が増加したため、平成10年からは転入超過に転じた。

平成26年は転入数12,312人、転出数11,352人で、転入超過数は960人となった。転入数、転出数ともに前年より減少しており、増加数は403人下回った。

図13-3 転入・転出の推移(中央区)

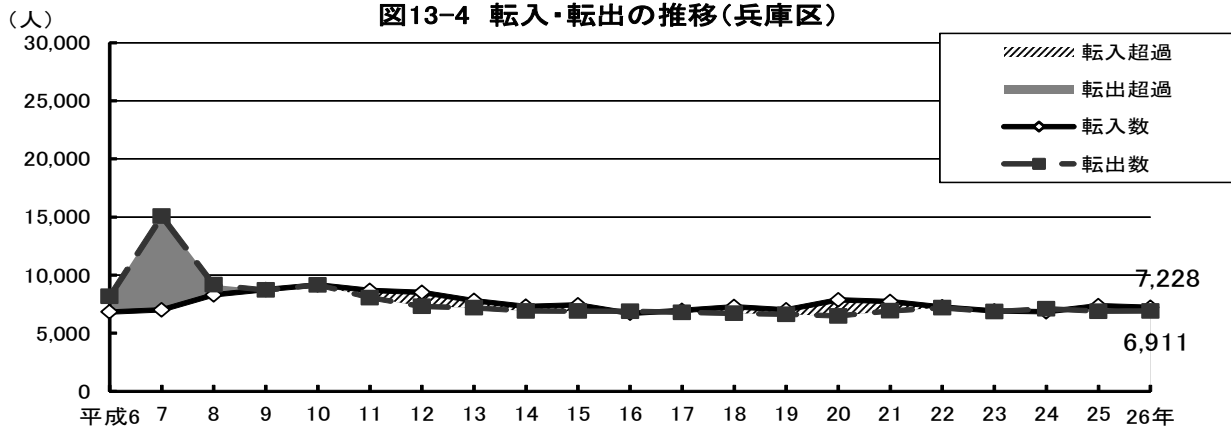


(4) 兵庫区

震災前は平均して900人前後の転出超過で推移し、平成7年には8,063人の転出超過となった。その後、キャナルタウンの住宅供給増加等により、平成9年から転入超過に転じた。平成10年以降、転入数、転出数とも減少傾向ながら、平成16年を除き転入超過が続いていたが、平成24年に転出超過に転じた。

平成26年は転入数7,228人、転出数6,911人で、転入超過数は317人となった。

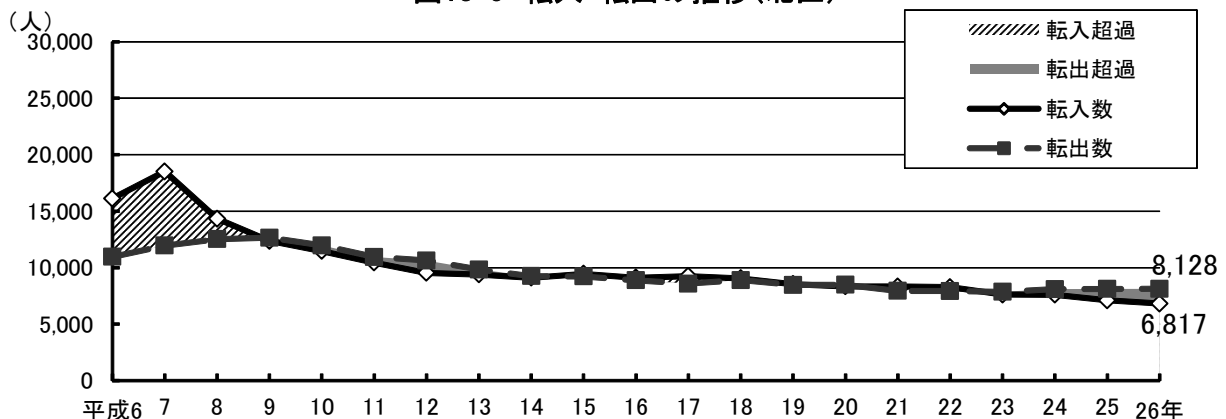
図13-4 転入・転出の推移(兵庫区)



(5) 北区

震災前は3,000~5,000人程度の転入超過で推移し、平成7年は仮設住宅の入居などにより、震災前を上回る6,555人の転入超過となった。しかしその後、転出数が震災前を上回り、転入数が年々減少したため、平成9年から6年連続で転出超過となった。その後、平成20年を除き転入超過が続いていたが、23年に転出超過に転じた。平成25年からは2年連続で転出超過数が1,000人を超え、26年は転入数6,817人、転出数8,128人で、転出超過数は1,311人となった。

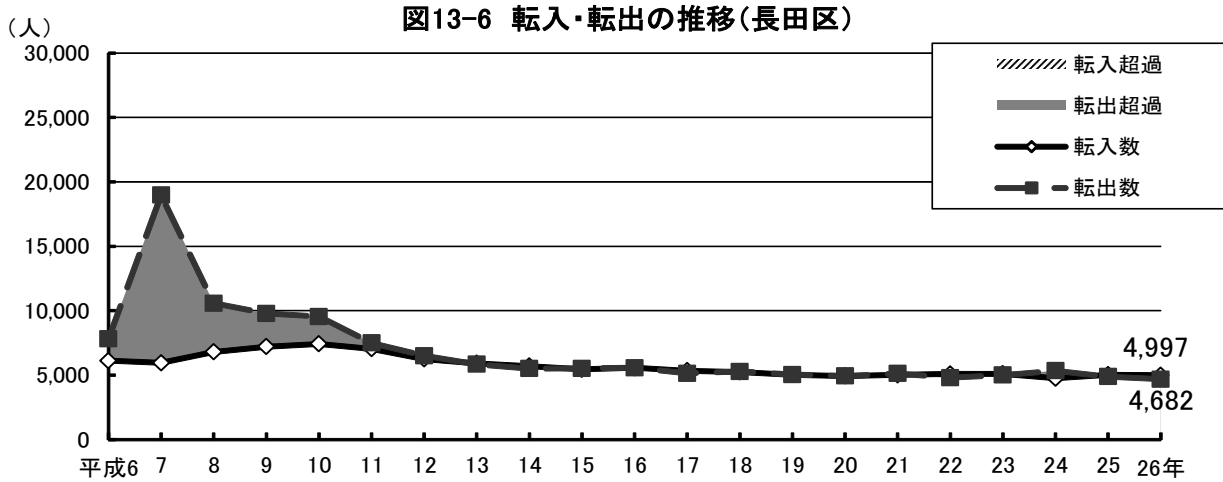
図13-5 転入・転出の推移(北区)



(6) 長田区

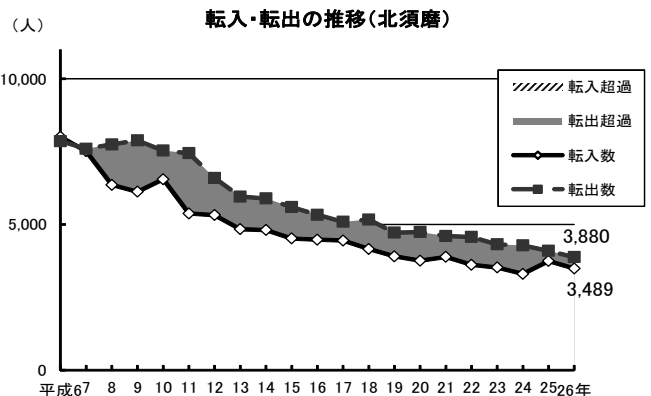
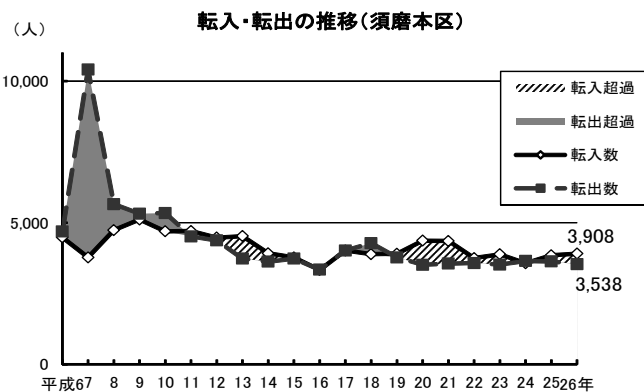
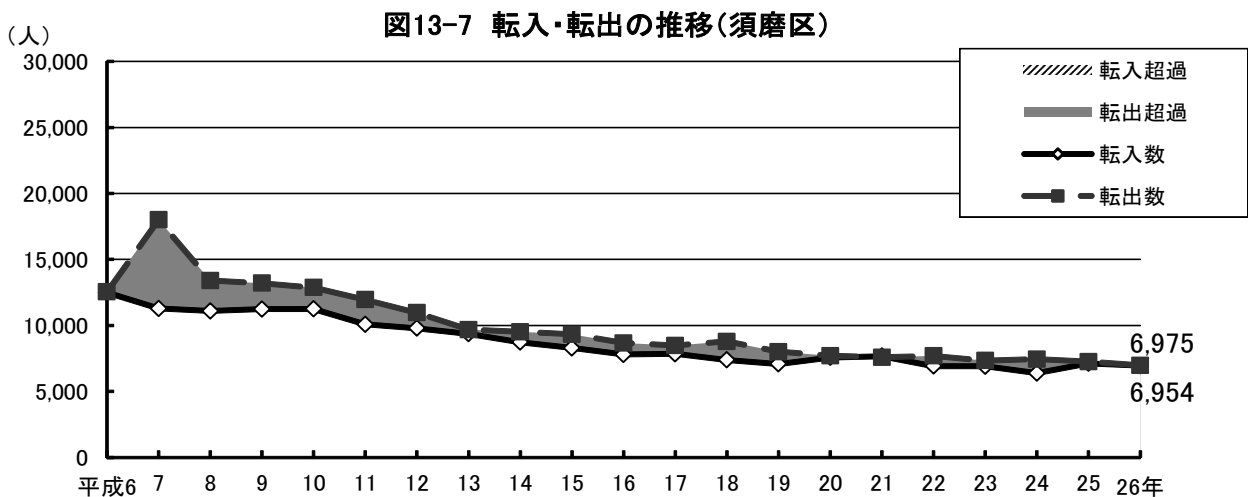
昭和38年から一貫して転出超過が続き、震災前には平均して1,400人程度の転出超過であった。また、平成7年には東灘区に次いで2番目に多い13,026人の転出超過となった。しかし、平成8年以降転出数は減少する傾向にあり、平成13年は転入超過数77人と、39年ぶりに転入超過となった。

その後超過数は小さいものの転出超過・転入超過を繰り返し、平成25年に転入超過に転じた。平成26年は転入数4,997人、転出数4,682人で、315人の転入超過となった。



(7) 須磨区

震災前は、平均して500人程度の転出超過で推移していたが、平成7年は6,722人の転出超過となった。その後、平成12年までは転入数は震災前並、転出数は震災前以上の水準で推移したため、1,000人を越える転出超過が続いた。平成13年以降も超過数の増減はあるものの転出超過であった。その後、平成21年に震災後初めて転入超過となったが、平成22年からは再び転出超過となっている。平成26年は転入数6,954人、転出数6,975人で、21人の転出超過となっている。



本区と北須磨をそれぞれ見てみる。概して本区は南部の旧市街地、北須磨は北部のニュータウン地域といえる。

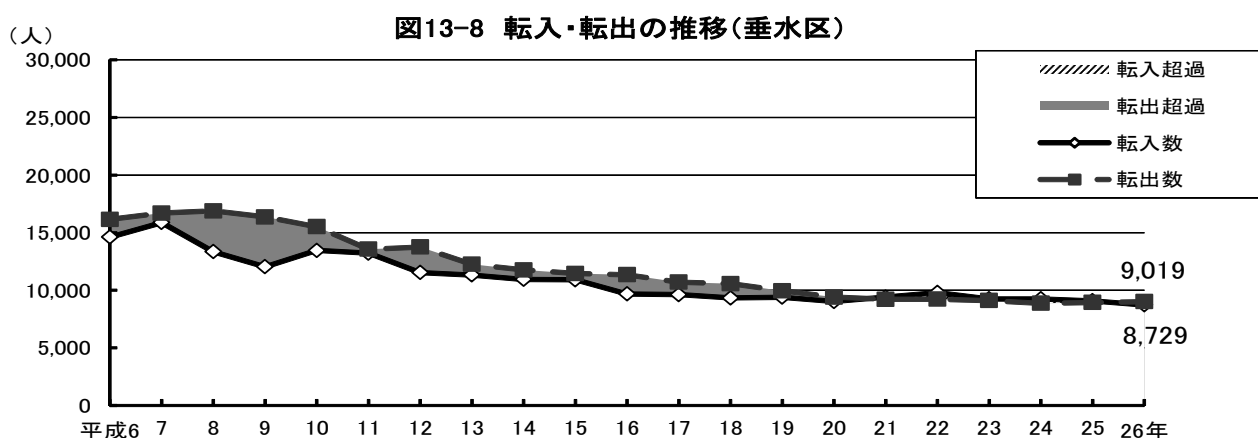
震災前に平均約700人の転出超過であった本区は、平成7年に6,635人の転出超過となった後、10年までは転出超過が続いたが、11年から5年間は転入超過となった。それ以降は転入超過・転出超過を繰り返しており、平成26年は370人の転入超過となった。

北須磨は平成7年以降一貫して転出超過が続いており、ニュータウンのオールドタウン化が進行していると考えられる。平成12年以降超過幅はやや縮小傾向にあり、26年は391人の転出超過であった。

### (8) 垂水区

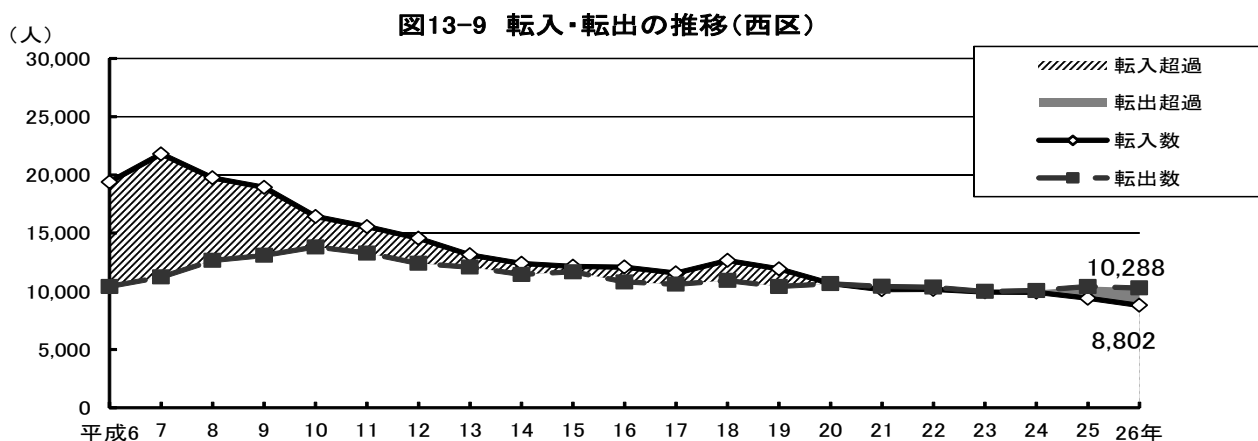
平成5年頃から転出超過の傾向が顕著となっていた。平成7年には転入数の伸びから転出超過幅は一時縮小したが、震災後の8、9年には転入数の大幅な減少により転出超過幅が拡大した。また、平成13年から15年にかけて縮小傾向にあった転出超過幅は、その後再び拡大した。

平成21年に17年ぶりに転入超過となった後は転入超過が続き、25年まで5年連続の転入超過となった。しかし平成26年は転入数8,729人、転出数9,019人で、290人の転出超過に転じた。



### (9) 西区

ニュータウンの開発等により、昭和57年の区発足時から一貫して転入超過が続き、震災前は9,000人前後の転入超過で推移してきた。平成7年は震災による仮設住宅への入居等により、転入超過数が10,572人と1万人を超えた。しかし、平成8年以降は転入数の減少により、転入超過数は急速に縮小していった。その後、転入数の増加により平成18年から2年連続で1,500人を越える転入超過が見られたが、平成20年に縮小し、平成21年には初めて転出超過となった。その後も転出超過が続き、25年から2年連続で1,000人を越える転出超過となった。平成26年は転入数8,802人、転出数10,288人で、1,486人の転出超過となった。





## 4 神戸市と周辺地域の人口移動状況

神戸市の人口移動は、震災前までは東播臨海部等へ人口流出する傾向にあり、震災の直後はそれがさらに拡大した。しかし、平成11年からは逆に東播臨海部等からの人口流入がみられる。また、神戸市内の人口移動にも変化があり、平成11年以降は郊外から市街地への人口流入がみられるようになった。平成26年の超過幅は前年に比べると拡大し、7年連続で市街地への転入超過となった。

以下は、住民基本台帳法に基づく転入、転出の届出数を集計したものである。

※東播臨海部：明石市，加古川市，高砂市，加古郡（稲美町，播磨町）

### (1) 神戸市と東播臨海部の人口移動状況

神戸市の周辺都市から日々通勤等で神戸市に流入する人口207,574人のうち、東播臨海部からの流入は67,027人（32.3%）に及んでいる（平成22年国勢調査）。そこで、神戸市とのつながりが深い東播臨海部を例に神戸市と周辺地域の人口移動をみる。

- 昭和58年まで神戸市は東播臨海部に対して転出超過であり、神戸市から東播臨海部へ人口が流出していた。
- 北区や西区のニュータウンへの入居が本格化したことなどにより、昭和59年から63年は一時的に転入超過となった。しかし、バブルによる地価高騰等の影響で平成元年以降再び転出超過に転じ、人口流出が続いた。
- 平成7年は震災により神戸市から多くの市民が東播臨海部へ避難したため、転出超過数が大幅に拡大した。
- 平成8年以降は東播臨海部へ避難していた市民が神戸市へ戻ってきたことなどにより神戸市の転出超過数は縮小し、11年に転入超過に転じた。12年以降も転入超過は続き、13年からの3年間は1,400人台の転入超過が続いた。その後も転入超過は続いているが、転入超過幅は縮小傾向にある。平成26年は113人の転入超過となり、超過幅は縮小した。

(人)

図14 神戸市と東播臨海部の人口移動状況

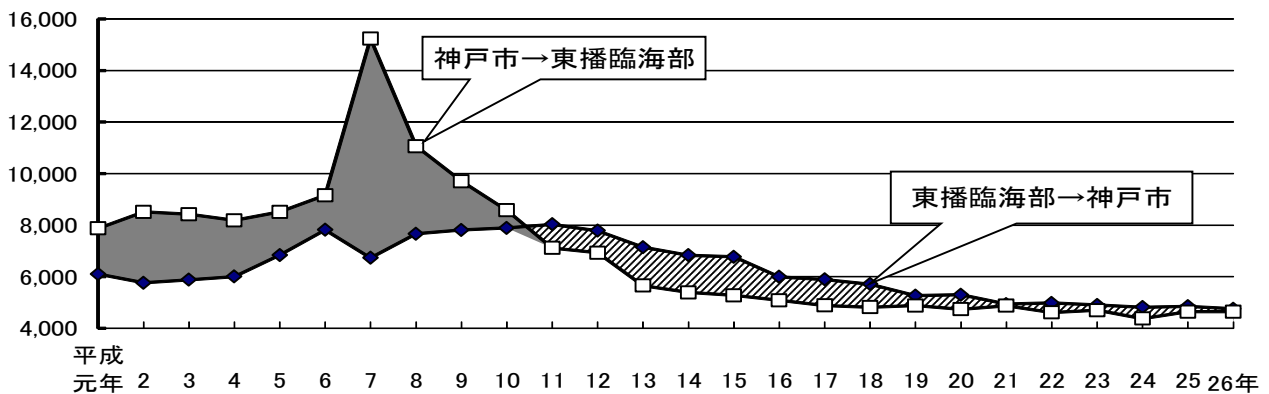


表9 神戸市と東播臨海部の人口移動状況

人口移動	平成元年	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13年
東播臨海部→神戸市	6,099	5,760	5,881	6,005	6,836	7,818	6,727	7,664	7,812	7,887	8,034	7,784	7,144
神戸市→東播臨海部	7,870	8,511	8,425	8,187	8,515	9,156	15,244	11,063	9,704	8,576	7,111	6,929	5,650
神戸市の転入超過	△ 1,771	△ 2,751	△ 2,544	△ 2,182	△ 1,679	△ 1,338	△ 8,517	△ 3,399	△ 1,892	△ 689	923	855	1,494

人口移動	平成14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26年
東播臨海部→神戸市	6,830	6,768	5,993	5,888	5,706	5,261	5,295	4,932	4,979	4,901	4,811	4,850	4,749
神戸市→東播臨海部	5,383	5,275	5,080	4,880	4,813	4,876	4,734	4,869	4,612	4,697	4,373	4,640	4,636
神戸市の転入超過	1,447	1,493	913	1,008	893	385	561	63	367	204	438	210	113

資料：住民基本台帳法（平成24年7月8日までは住民基本台帳法及び外国人登録法）の規定に基づく届出数

(2) 神戸市内の人口移動状況

神戸市内を市街地（東灘区、灘区、中央区、兵庫区、長田区、須磨本区）と郊外（北須磨、垂水区、北区、西区）に2分し、両地域間の人口移動をみる。

- 平成6年までは、市街地は郊外に対して年間約6,000人の転出超過となっていた。この頃は、西区や北区のニュータウンへの入居が本格化した時期であり、バブルで地価が高騰したことも重なり、人口は市街地から郊外へ流出する傾向にあった。
- 平成7年は震災の影響で、被害の大きかった市街地から比較的被害の小さかった郊外への急激な人口流出が起きた。
- 平成8年以降は、郊外へ避難していた市民が市街地へ戻ってきたことなどにより、市街地の転出超過幅が縮小し、平成11年に転入超過に転じた。しかし、平成12年の1,936人をピークに転入超過数の幅は縮小している。
- 平成19年には9年ぶりに市街地からの転出超過になったが、平成20年に再び市街地への転入超過となり、以降は転入超過が続いている。
- 平成26年は市街地への転入超過数が1,261人となり、前年と比べると超過幅も拡大した。

図15 神戸市の市街地と郊外の人口移動状況

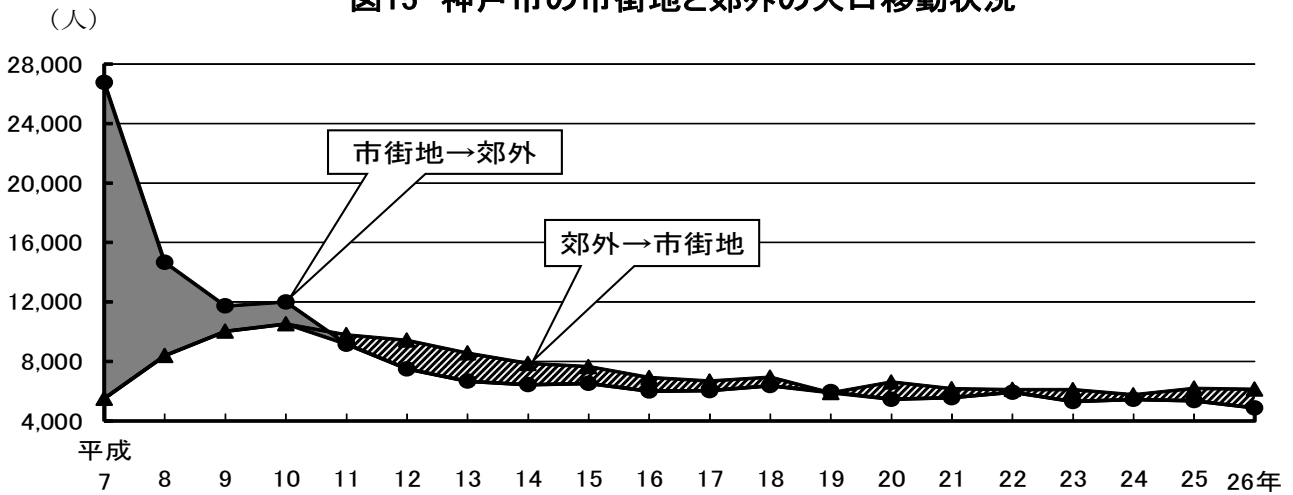


表10 神戸市の市街地と郊外の人口移動状況

人口移動	平成7	8	9	10	11	12	13	14	15	16年
郊外→市街地	5,515	8,392	10,030	10,524	9,792	9,433	8,571	7,864	7,649	6,918
市街地→郊外	26,773	14,667	11,727	12,005	9,163	7,497	6,672	6,440	6,525	6,010
市街地/転入超過	△ 21,258	△ 6,275	△ 1,697	△ 1,481	629	1,936	1,899	1,424	1,124	908

人口移動	平成17	18	19	20	21	22	23	24	25	26年
郊外→市街地	6,684	6,943	5,895	6,622	6,172	6,118	6,100	5,759	6,198	6,136
市街地→郊外	6,042	6,373	5,960	5,462	5,562	5,933	5,302	5,447	5,356	4,875
市街地/転入超過	642	570	△ 65	1,160	610	185	798	312	842	1,261

資料：住民基本台帳法（平成24年7月8日までは住民基本台帳法及び外国人登録法）の規定に基づく届出数

（担当：三吉 内線2328）